東京学芸大学教育学部 附属
小金井小学校　同窓会

撫子の会

会報 5号

小学校は
エンピツの
匂い

●特集

1＝それぞれの源流
2＝第三回総会報告
3＝母校からのメッセージ
他＝名簿を編纂してみて　ほか

藤田新会長＝総会での就任挨拶

…新しいページを開く努力と行動を

「小学校は削りたてのエンピツの匂ひ」いつまでも忘れることのない小学校の仲間達。

学芸大学附属豊島・追分・小金井の三校同窓会が一体となって約十年。第三回総会が、平成十四年五月十八日、小金井小学校にて迎えました。

この度、この由緒ある「撫子の会」会長にお選びいただきました、藤田暉夫でございます。

「撫子の会」会長としての器、自分自身では、まことに忸怩（じくじ）たる思いで一杯であります。しかし母校への恩返しとご選出下さいました諸氏への感謝をこめましてお受けし、鋭意努力の覚悟と前進実行の強い気持の現在です。

本総会にご来会の皆様には、何卒のご了承を賜り小生へお力を下さいますようお願い上げます。

又、私はさておき、金子副会長は、日本の、世界のデザイン界の雄ですし、各理事も、経済・法律・人生等各界のリーダーに受けていただきました。この体制を皆様ご理解下さいまして、全理事へのご支援もお願い申し上げます。

次に、小生の自己紹介を簡単にのべます。私は昭和六年中野区生れです。豊島校を昭和十九年・三十三回生の卒業です。其後の学歴・職歴申し上げる程もございませんが、「男子敷居をまたげば七人の敵あり」を充分経験し、最後一社を司どって、六十五歳でリタイアいたしました。以降、中野区のため、人のためのお役にと考え、町会長、保護司、中学校評議員、学校問題委員を現在続け休日もない現状です。趣味は、楷書だけの書道、半世紀以上の愛好ジャズ、映画で感動、TVを見ずの読書こんな処でしょうか。

私は、今年賀の折「新しいページを開く努力と行動を」心にきめ、本年はその実行を自身に課しました。又私は、過去の分析はいたしますが、余りそれに拘らず、明日の太陽を目標にして行く自分でありたいと願っています。新しいページと次の目標、これも会長をお受けする課題として歩を進めることをいたしました。

日本で有数の歴史、多くの人材輩出、伝統ある「撫子の会」が脈々と栄えますよう、正強美親朗の確たる教育を認識しつつ、学校、先生、撫子の校章の下の生徒諸君・そして父兄に、少しでも良い風になるよう微力ですが、先輩として努力してまいります。重ねて、皆様のご指導を切にお願い申し上げて、不肖、会長の挨拶といたします。

昭和十九年豊島卒　**藤田　暉夫**

福富校長＝ご挨拶

…同窓会の力は学校にとっての支え

豊島、追分、小金井の三校が一体となって「撫子の会」が発足されてから、もう十年にならんとしております。それぞれの学校の持っている伝統の重みがさらに加えられ、小金井小学校を預かる身としましても、心引き締まる思いであります。撫子の校章を基に、さらに豊かな人材の育成に心がける所存であります。

さらに今回から、これまで長らく会長としてご苦労頂きました天城勲先生に替わって藤田暉夫会長の下で新たな歴史が刻まれるとのこと、何よりも先ず天城先生のご尽力に心から敬意と感謝を表したいと思います。さらに今後、藤田新会長の下で「撫子の会」がさらに発展されますよう祈念致します。

申すまでもなく附属学校は、保護者を始め、大学や地域等の多くの力に支えられなければ、効果的な教育活動を展開することが叶いません。同窓会の力は、学校にとって大きな支えであります。

本校を巣立って社会で活躍されている多くの同窓生諸氏の支えは、学校にとって誠に力強いものであります。同総会の発展は学校の発展にとって不可欠と言えるでしょう。今年度は、十一年ぶりに同窓生名簿も改訂されるとのこと、名簿の改訂という大変な仕事がなされうることも同窓会の持つ力だと思います。今後ますます「撫子の会」が発展されますことを祈念致し、ご挨拶とします。

小金井小学校校長　福富　護

特集1＝それぞれの源流

…豊島、追分、そして小金井

三校の流れが一つになって生まれた母校と同窓会。源流にはそれぞれの山ふところの風景と時代がありました。それを知る機会にと、編集部からお願いして一文をお寄せいただきました。

『懐旧』

昭和十九年豊島卒　**小池麒一郎**

私達の時代、母校は池袋にあった。駅には二つの私鉄が乗入れ、近くに立教大学や吾が校があったが、向い側は雑司谷の墓地もあり、今のような賑わいはなかった。学校に通じる商店街の月並で豊島堂といった文房具店の裏に広場があり、時々香具師が巧みな口上で品物を売りつけ、下校の時に見入ったりした。校舎は当時すでに近代的な鉄筋コンクリート造りであり、雨天体操場(体育館)プール、土俵まで設備されていた。さらに、武蔵野に成美荘、箱根に一宇荘、鵜原には至楽荘があり、夫々の自然環境に対応した寮生活が営まれた。

教師陣は選ばれたエリート集団で、きちんと背広ネクタイ着用での授業は風格があったし、熱意溢れる教育姿勢だった。こうした状況も戦争の進展に伴って次第に戦時色に染っていった。新任の校長が初めての式典で教育勅語を奉読した時、九州訛のおかしさに耐えられず笑ってしまったが、外に引きずり出されて、ひっぱたかれた。

修学旅行は私達の年度から中止となった。中学校に進んだ頃から、空襲、敗戦、食糧難と苦難の生活を体験し、教育も理念、制度の激変期に遭遇した。振り返えると私達の年代は極めて不安定な教育課程を辿ったが、小学生時代だけは未だ古き良き時代の名残りの中にあった。仁、徳、禮、また恥など古来の伝統的民族思考体系のなかでの人間教育であって、個人主義的現代教育の実態を見聞するにつけ、豊島時代が深い思い出となって回帰される此の頃である。

『思い出』

昭和十五年豊島卒　**松井　玲子**

楽しかった六年間の種々な思い出の詰った豊島師範附属小学校。そこから歩いて十分位の所で生まれ育った私は父が三回生。叔父叔母が夫々六回、八回、十二回生という事で、私の生まれる前のトシマの話を祖母から聞かされた。瓢箪池の畔の柳の木で師範の生徒が首を吊って死んだ事があるとか。私の通った校舎は三度目のもので、それまでに二度の火災にあった事があり、その一つは六回生の叔父の卒業式の前の日で、今と違って情報伝達も速やかに行かない時代の事とて、遠くから正装して来られた父兄の方が茫然と立ち尽くしておられたとか。そんな話を

してくれた祖母は勿論、父や叔父も亡くなり、私もいつのまにか七十も半ばという年齢になってしまった。

私は月に何度か千早町に行く用がありバスを利用するが、バス停のある所も昔の構内で、今は芸術劇場が建ち池袋西口公園と言うらしい。すっかり様変わりして見当もつかないながら公園の端に並んでいる大きな木を見るとプールの横に立っていた木のように思えてならない。今の池袋駅の北口があの頃の駅舎で、そこから正門に続く商店街を制服制帽の男の子や女の子が定期をぶら下げたランドセル（徒歩通学の私は羨ましかった）をカタカタ鳴らしながら歩いたり走ったりしていた姿を昨日の事のように思い出す。

式の日に頂いた紅白の餅菓子を学校へ納めていた三原堂、駅前にあった人力車乗り場の横にあった果物屋のゆう文を北口から続く道の商店の間に見つけた時は、当然、代変りしていて私の事を知っている人がいる筈はないと思いつつも、子供の頃を思い出して懐かしかった。

今は跡形もない母校の周辺を見るにつけ、こうして時代と共に世の中が変って行くのだとつくづく思っているこの頃である。

『撫子の会』

昭和十五年豊島卒　猪俣　節子

昭和九年、豊島付属小に入学しクラスの友人達とのお付合いは七十年にもなろうとして居ます。

夫婦よりも、親子よりも、なが～いお付合いだとみんなで妙な事に感じ入っている我等はおおボケ、まだらボケのズッコケバーバちゃま達中です、四捨五入して八十歳？

「まこと人間の遭遇ほど味なものは無い」（折口信夫）豊島付属小を通しての不思議なえにしです。

月に一度位は何となくお顔を会わせ、喧喧囂囂、侃侃諤諤の談論風発！

十五名程が幹事のお誘いでトラさんの柴又を訪ね、東京都の「川甚」で食事、矢切の渡しで千葉県へ、次葛飾の水元公園の花菖蒲「立てば芍薬坐れば牡丹、歩く姿は撫子の花」とシャレてみたり半日で一都一縣をまたに掛けたと威張ったり、パラソルをさした友に「ほんに竹久夢路の絵のような」「後姿だからこそ絵になる」とからかったりの一日でした。

又、残雪の北アルプスの連山々を満喫、白馬の水芭蕉を訪ね「年寄りの冷や水、今更スキーはムリ、五十年遡りたい！」と嘆いたりも致しました。

山と言えば一宇荘での駒ケ岳？縦走を思い出しました。頂上で一休み、釣瓶で汲み上げ、むさぼる様に飲んだ冷たい水の味は正に甘露、甘露。生涯の思い出です。至楽荘で四キロの遠泳、クラゲに刺されながら全員無事泳ぎきったのは素晴らしい頑張りでした。やっとやっと浜辺に辿り着き、焚き火を囲みながら頂いたアツアツの甘酒は心に染み入る甘さ、と、想い出すのは食べ物ばかり。

学校生活の中で、非日常的な行事は何年経っても脳裏に焼きつき、鮮明な記憶として残りすごく貴重な体験だったと思い返しております。一方、豊島のギュウギュウ詰めの特訓を感謝している現状。未だ明晰？であった頭脳は柔軟に受入れてくれ、現在でもとても役立っています。任せときィーと、独りよがり？な自信(地震？)を持続している面が多々あります。

生活は豊かになりましたが逆に人の心は貧しく、人や物への愛が失われた感があります。物は簡単に失われますが、身に付いた教育は誰にも奪う事は出来ません。戦時中の青春であったとは言え、礼儀作法、批判力、判断力、理解力、決断力、実行力、そして自己責任を全うする事を教えられました。正しい（少なくとも現在よりは）母国語を教育された事も幸せに思います。

最近は残念ながらアレ、コレ、ソレの連発…老害は消え去るのみ、とうに耐用年数切れで遠からず廃棄処分の憂目に会いそう。老いては子ではなく、個に従って独立自尊と行きましょ。

七十？年も浮世の風に曝される、まあ、アテは向こうから外れるサと、チヨッピリ諦めの境地。

人生は、弛緩と緊張の連続と申しますが、弛緩のみのさばっている昨今の状況。

五感の衰え、五体不満足な我々は世の中の乱れ不条理に、口だけは達者なゴマメの歯軋り…。

「生老病死」の「老病」の狭間をフワフワと漂いながら、パソコンに嵌まり徹夜もしきの日々。

皆で、勝手気侭に、ただただ前進あるのみ！と怪気炎を上げております。一寸先はヤミって事もありますけれど…、豊島の素晴らしい友人達と華麗に加齢をと願って居ります。

『豊島附小時代の想い出』

昭和二十一年豊島卒　山之内秀一郎

私たちの小学生時代というのは、戦争による時代の激変に奔走された思いがする。まず、太平洋戦争前の豊かで、気分の昂揚していた時代、社会全体としてはともかく、豊島のクラスメートの大半は比較的豊かであった。それが間もなく戦争への突入と集

団疎開、そして、戦争と戦後の廃虚の思い出、親を失った友人もいたし、私の父も完全に数年間職を失って無収入の状態が続いた。

私の豊島師範附属小学校への思い出は非常に強い、なにしろ三回も入学したのだから。そして、その三回がそれぞれの時代を映している様な気がする。第一回目は二年生への補欠入学で、これは今だからこそ告白するが、完全な裏口入学であった。祖父が高等師範の教諭から東京都の教育界の有力者になったため、試験前に祖父と校長室へ招かれたし、口頭試験では答えがわからなくても、先生の方が全て教えてくれて、私は「はいそうです」と繰り返すことが多かった。補欠生一名募集のはずが、何故か私ともう一人採用になった。

しかし、兵庫県姫路市郊外の田舎町の小学校から転入した豊島師範附属小学校の学力レベルは驚異的であった。たった一年間でこんなにも違うのかと、一年生の時は田舎の小学校の級長候補だったのだが、豊島では一転して田舎者の劣等生としてのスタートとなった。

しかし、たった十ヶ月で、父の勤務の都合で、富山師範附属小学校に転校、ここの学力レベルも豊島に劣らず高かった。そして、再び四年生の二学期に豊島師範に戻る。この時には体操を除いて学力のハンディキャップはなくなっていた。

五年生の夏、クラス全員が山形県上ノ山温泉に集団疎開することになった。歌の文句ではないが上野発の夜行列車に乗って、九時間かかって上ノ山駅に着いた。その頃は何となく戦況が不利らしいという不安があったが、それを言うのはタブーだったので、まだ遠足の延長の様な気分だった。

疎開中の思い出は沢山ある。スキー、蔵王登山、芋煮会、将棋、百人一首、そして、田植え、稲刈り、いなご取りなど都会子には得難い体験だった。良いことばかりではない、何かあると全員「往復ビンタ」そして、風邪の集団発生、私が発生源にされてひどいいじめを受けた思い出もある。

なんといっても一番辛かったのはひもじかったこと。昭和十九年のうちはまだ良かった。二十年になると食糧不足がひどくなり、栄養失調状態になりだした。私の母は子煩悩で、上ノ山に一室を借りて滞在し、私にこっそり届けてくれたのだが、これが見つかって先生に叱られ、仲間からもいじめられたが、やがて、いじめが「僕にも少しよこせ」に変わった。昭和二十年六月、あまりの食糧不足に親が心配し、昔の女中さんの実家を頼って新潟県の片田舎に縁故疎開した。そして、終戦。九月になって何とか父が苦労して汽車の切符を手に入れ、東京に戻ったのだが、大宮から上野までの一面の焼野原には愕然とした思いだった。

二ヶ月ほど近くの小学校に通っているうちに、クラス一同が上ノ山から戻ってきたので豊島師範に三度目の入学、焼けた校舎で何とか卒業を迎えた。ただ、終始一貫、豊島師範附属小学校の教育は厳しく、時には暖かく、そして、レベルは高かった。

『バイエルの音風景』

昭和二十五年追分卒　**金子　修也**

今年六十五歳になった私が「追分国民学校」に入学したのは昭和十九年だった。初めての日、セルロイドの筆箱を開けると鉛筆の匂いが立ち上った。幼稚園はクレヨンの匂いだった。当時は旧仮名づかい。「コクミングワッカウ一年生」になったのだ。ランドセルは戦時の物資不足ですでに牛革製はなく、この年の一月に出征した父が、息子の入学にそなえて八方探して何とか入手できた豚革製だった。それでも布製よりはるかに上等だった。

そのランドセルからとりだして読む国定教科書の、国語の第一ページは…

「アカイアカイアサヒアサヒ」だった。

つづいて…

「ハトコイコイコマイヌサン
　アコマイヌサンン」
「ヒノマルノハタバンザイバンザイ」
「ヘイタイサンススメススメチテチテタ
　トタテテタテタ」
「ソラガハレタウシガナク。モウトナク。
　ピイチクピイチクヒバリガアガル。
　テンマデアガル。」

赤い赤いアサヒは、いまはビールの商品宣伝だが、当時は日出る国の象徴。そしてアウンの呼吸で神社＝神道イズム、日章旗、お国のために戦う兵隊さん、我が麗しの国土へと展開する、まさに軍国少年少女の自覚、愛国心発揚の仕組み。ではあるが、不思議に清々としたこの文章を、私はいまも忘れられずにいる。軍国はともかく、美しい国を願う愛国が悪かろうはずはない。

その年の秋、習字の塾で墨をすっていると警報サイレンがなった。あわてて道具をたたんで、あたふたと玄関を出ると、澄み切った秋の高空に敵偵察機一機が戦闘機のお供もなく飛来。わが方に迎撃機はなく、後楽園の高射砲陣地からズドーンズドーンと何発か発射した弾も、敵機のはるか下で煙り花火のように炸裂して届かない。

これを皮切りに偵察機の飛来は日ごとに増して、やがて空襲がはじまり、追分国民学校の教室は疎開

した生徒で日を追って空席が増えた。追分校の集団疎開先は栃木県那須郡だった。

翌昭和二十年の一月、二月、三月…、東京が焦土と化して行くなか、わが家も留まりきれず神奈川県厚木近くの遠戚を頼って疎開した。今は小田急線で一時間と少しだが、その時は敵機襲来で何度も避難停車しながら、丸一日かけての旅だった。

そしてこの夏終戦いや敗戦。空が黒いほどに晴れて蝉が鳴き繁る村落に玉音放送が流れた。疎開先は遠戚のこと、いつまでも迷惑はかけられない。終戦の日から半月ほどで帰京した。東海道線回りの帰途、横須賀あたりから東京まで焼け野原が続いていた。

追分校は文京区本郷の東大農学部前にある。本郷通りから分岐してここから中山道がはじまるため、江戸時代、追分の地名になった。一帯は戦災をまぬがれたので、昭和二十年の晩秋であったか再開された学校に、疎開先から友だちが続々ともどってきた。友人の父親は復員してくるものの私の父は戦死してもどらず、あの報せは間違いだったと願う日々が続いた。

そんなある日、「本校は東京第二師範女子部の附属になる」とのこと。追分は区の学校。それが師範の附属になる。町っ子が附属っ子になる。くすぐったいような話だし、月謝も上がるようだ。とまどう父母たちもいた。

昭和二十年、なぜ町の学校が附属になったか。国は多くの男性教師を戦地で失くし、教師の育成補充が国家的急務であった。戦争によって男性の人口が激減していたため、女子師範学校の急速拡充を要した。それにともない附属校を必要とした。これが附属追分小の水源縁起物語りだ。

その流れには数年のあいだ波立ちがあった。卒業までの大部分を町場の学校として過ごした学年の思い出は追分国民学校だ。附属になって、それもいいねと思う家庭の子。戦災による小学校の不足と満杯によって、附属なら地域外からも受け入れてもらえるからと編入してきた、疎開からのもどりが遅かった子。兄姉は附属だが弟妹は区立に入れた家庭の子。昭和二十四年に追分附属中が開設されて後も、区立中学という町場に返ったネイティブの級友。そして校舎はもともと区のもの。ネイティブの私は、町での暮らしの周囲に子供ながらにも微妙な対立の空気を感じとりもした。

その校舎は女子師範も同居で、廊下にピアノが並び、放課後にはバイエルの練習曲が重なり合った。師範学校のスペースは学芸大への統合と追分附属中の開設にともない縮小され、私が中学生のとき完全撤収した後の校舎に文京区立六中の一部が入居して、学内はいささか緊張した。

追分の校舎は、関東大震災後に東京都が帝都復興計画の一環にした学校建築不燃化政策のもと、昭和初期に建設された昭和モダニズム建築のひとつで、同じころ建設された小学校舎には、新宿区四谷第四小のようにバウハウススタイルをほうふつとさせる名建築がある。現存する追分の校舎は、オリジナルの窓回りが形を変え平板化し、白色が薄緑灰色に塗り替えられ、玄関外壁上にあったアールデコ調の大時計も取り外されていて、事情はあったにせよ惜しいことに歴史的面影を失った。今は文京六中が全校舎を用いている。

私は文京区本郷から西東京市に移転してすでに四十年になる。たまに懐かしくて本郷界隈を訪れてはみるものの、他校になった校舎には入りがたい。西日が差している廊下にバイエルの練習曲が重なり合っていたあの音風景の空間は、いま思い出のなかにしかない。

追分小は小金井に、中学は竹早に合流して、校舎はもとの持ち主に。ではあっても、小金井校は自宅から自転車で三十分ほどの距離。自転車散歩の途中、したたる緑を求めて時折り寄ってみている。こうして地元感覚が生まれ、また撫子の会で豊島の先輩、小金井の後輩と親しくなって、母校感覚は濃さを増した。中学はといえば、一九九七年の五十周年記念行事にあれこれ参画して、そのとき私がデザインした植樹寄贈記念碑も在ることで、すでに母校となっている。在学生向け講演や研究公開授業にもデザイン専門家として招聘され、子供たちにとってみれば先輩。追分もへったくれもないものだ。

附属になってからの追分小の流れは短くまた複雑だった。それゆえ、合流した「撫子の会」の川面の色合いに時代の奥行きをそえる、わずかながらの隠し色であればうれしいことだ。

◀ありし日の追分校々舎

『想い出されること』

昭和二十六年追分卒　藤澤　治美

附属追分小学校の校舎は、今、文京区立の中学校になっている。史蹟としての説明板に彩られ、風格を添えている。本郷三丁目方面から「六義園」のある上富士方面に向かう通りは反対側が東京大学で都電が通っていた。停留所は、赤門前、正門前へと続き、次の農学部前で下車しての電車通学が始まったのは四年生の終わりに編入試験を受けて合格し、晴れて「東京学芸大学東京第二師範学校女子部附属追分小学校」という長い長い名前の学校の生徒になれた故であった。第二次大戦後の民主主義の導入にも助けられて冒険も許されたのだろうか「可愛い子には旅をさせ」の心境とも相容れて親子の信頼関係が成り立っていたに違いない。周囲の立地条件から附属の生徒達は、おしなべて東大構内を自由に出入りすることが可能で、三四郎池の畔での図画の時間の写生、五月祭の見物など含めて無意識のうちに東大のキャンパスライフを楽しんでいたことになるのかも知れない。

五年、六年と担任は腰山太刀男先生で、よく作文を書かされたことを記憶している。私はいつも家族のことを書いたように思う。三人姉妹の長女で育った為に、割合に母の手伝いをしたが、年子の妹はお手伝いが嫌いな反面、お姉ちゃんお姉ちゃんと絶えずつき纏って来たりするので、いかに上手く巻いて遊びに行こうかなどと考えていたので書くことは沢山あったのだ。

先生は、言葉使いが丁寧で、私は今もって耳の奥に、その響きをしっかりとキャッチしている。正しい日本語を話せる年代の構成員の一人になれるに違いないと確信している。決して友達ことばで話せる時代ではなかったのだ。

今年は二年に一度の「先生を囲む同期会」を催す年でもあるため、先生にもお元気でお出ましを戴いて楽しい会に出来たらと心から願っているところである。新装なった「撫子の会」の前途を祝し理事の一員としてお世話になった十年間の総てに感謝を捧げて次なるステップへ胸を高ならせてもいる。

『覚えていますか〈たいへん よくできました〉の評点丸印を』

昭和三十二年　追分卒　岩崎　嵩

私にとって追分小学校と言えば腰山先生である。中学校から一貫教育私立校へ進学した私には、追分小学校のクラス会は貴重であり、六年間机を並べ共に遊んだ仲間は、何時どこで会っても楽しく大切な友である。腰山先生には、これからもご壮健で、我達の師として末永くご指導頂きたい。

私の記憶では、初めての作文は小学一年三学期の「せつぶん」であり、在学最後の作文も卒業を目前にした三学期の「節分」である。黒の厚紙表紙の思い出深い作文帳は、黒紐で綴じられ、手のひらに乗せ、ほんの少し頁を送るだけで原稿用紙・鉛筆の品質等から時代・社会の変化や進歩を知ることが出来、その文面・書体は少年期の懐かしい思い出と成長過程を楽しく鮮明に教えてくれる。文中には先生の赤ペンによる指導が優しく丁寧に記されている。そして秀作には「たいへん よくできました」の評点丸印（直径五～六センチ程度）を押して下さった。一組の皆さん、覚えていますか。それが私の作文帳に幾つあったかは別として、実に嬉しい、素晴らしい評点丸印であった。

先生は体育もお得意で、校庭角のジャングル鉄枠の上で逆立ち(倒立)をしばしば披露し、幼い私達はサーカス見物気分で拍手喝采した。先生に「たいへんよくできました」の評点丸印を差し上げたい。

それから私達が行事のある毎に合唱していた「運動会」「遠足」「林間学校」「臨海学校」そして卒業後覚えた「追分音頭」等、殆んどが腰山太刀男作詞・飯田秀一（二組・飯田君の御尊父）作曲であったことは、私達同学年生にとって大いなる喜びと誇りでもあった。

又、学業および生活指導に関しては、生徒一人一人の学力・個性に応じた指導に努めておられた腰山先生の笑顔が思い浮かび、今更ながら木目細かく丁寧な指導ぶりであったことが良く分かる。目から耳から、そして心から、全身で愛情深く指導に当って下さった先生に、改めて敬意と謝意を表する次第である。

学芸大学附属小学校という性格から、恐らく教育現場では他校にない諸々の試みがなされたと思われるが、追分小学校に在学し、立派な諸先生方の下、小学校教育を受けられた私達は大変恵まれていたことを再認識すると共に感謝している。

今、恩師を慕う者として、腰山先生の様に春夏秋冬を感じさせる優しく活動的な文化人に少しなりとも近づくことを自ら願っている。

そして小金井へ…

『ふたつの母校』

昭和三十九年小金井卒　佐々　智樹

学芸大学附属小金井小学校の第一回卒業生である我々は、昭和三十九年（一九六四年）三月十七日の早春に卒業式を迎えた。豊島小学校に五年生まで通った我々は、同校の廃校と共に小金井小学校に六年生として編入し、新設校であった小金井の最高学年は五年生であったため、六年生だけが全員豊島小学校からの編入組となった。イギリスでは、ザ・ビートルズが音楽で革命を起こしていた。そして、この年の十一月二十二日にはジョン・F・ケネディが暗殺された。一九六三年年の話である。

豊島小が廃校になると言う噂は耳にしていたが、自分たちが六年生になる年に全校生徒が世田谷、竹早、大泉、小金井の四校に振り分けられることになるとは夢にも思わなかった。当時ＰＴＡの学級委員をしていた母達は廃校反対に立ち上がり、校門の前で行ったハンストの最中に同級生のお母様が過労で倒れ、救急車で運ばれると言う事件が新聞に大きく報道され、世間の耳目を集める事になった。

そういった事件もあったが廃校の決定は揺るがず、全校生徒は通学に便利な学校を自主的に選ぶことで四校に分かれることになったが、最後まで調整がつかず、一年間だけ豊島に残ることが許された生徒もあり、結果として我々豊島の同期は最後の豊島小学校卒業生五十四名、竹早小学校編入二十二名、小金井小学校編入、第一回卒業生の五十三名に別れた。

小金井小学校六年生の想い出は、たった一年間であったが私には鮮烈だった。当時の池袋、豊島小の辺りは水上勉の小説「飢餓海峡」の舞台としても登場するバラックの飲み屋が学校の横にまで広がる悪い環境。しかし、池袋駅は急速に発展しマルブツデパート、東横デパート、三越デパートが活況を呈していた。そんな都会で育った生徒がのどかな畑の広がる小金井の地に移って来たから、毎日が成美荘生活、駅から学校の往復は遠足気分であった。

学級は豊島の三クラスが、一組両角亮治先生担任の二十六名と二組大島富明先生担任の二十七名に再編された。豊島ではクラス替えが無く、各クラスはあまり交流がなかったから、最初は緊張の連続で多少のいざこざもあったが、あっという間に学年五十三名全員が仲良くなった。廃校と言うショックと編入と言う新しい生活に「負けずにがんばろう！」という雰囲気が芽生えたのだと思う。しかし、編入した我々六年生は兎に角よく問題を起こした。小金井の規則など気にかけず、自分たちは豊島の生活をそのまま通してしまった。小金井生え抜きの生徒から見れば迷惑であったと思うと共に、五年生以下の豊島編入生に苦労をかけてしまったと思う。

私たちと同様に先生たちも各校に別れて新しい職場に就いた。私の担任の大島先生は追分からすでに赴任していたが、両角先生をはじめ高田美枝先生、長谷昭先生、熊谷更新先生、鈴木勇先生、田中準先生、伴勝雄先生は、その同じ年に豊島から一緒に小金井に移り、相原永一先生、石塚健二先生、岡虎夫先生、白井鉄平先生達は一年遅れて着任された。新しい学校の雰囲気になかなかなじめない我々を優しく、時には厳しく指導してくださった素晴らしい先生方であった。懐かしくて、胸がいっぱいになる。

さて、冒頭で触れたが我々は中学三年の時にザ・ビートルズ来日を経験した「ビートルズ世代」である。六年生の頃、ラジオから流れてくるポップスに興味を持ちはじめ、「不良の音楽」といわれながらヒット曲にドキドキした。確か六年生の冬休みにＦＥＮから流れて来た「シー・ラブズ・ユー」を聴いて大ショックを受けたのがビートルズとの初めての出遭いだったと記憶する。「世は唄につれ…」ではないが、どんな時代だったかを、一九六三年のアメリカのヒット・ソングで振り返ってみると、「ヘイ・ポーラ」ポール&ポーラ、「パフ」ＰＰＭ、「サーフィンＵＳＡ」ビーチ・ボーイズ、「ブルー・ベルベット」ボビー・ビントン、そして、日本人歌手が全米一位の「スキヤキ」坂本九などがある。ビートルズがアメリカを席捲する直前、アメリカン・ポップス全盛であった。そんなことで、すっかり軽音楽に魅了された私は、幸か不幸かその後ラジオ、そして、レコードをプロデュースする仕事に就いている。

さて、小学校の統廃合を経験し豊島から小金井へ、二つの母校を持つ世代の一人として、同窓会運営にこの度も参加させて頂くことになった。少しでもお役に立てるようにがんばる所存です。末筆になりますが三校合同の撫子の会実現にご尽力を頂いた横山正先生、藤原直之先生をはじめとする小学校先生各位に心から感謝し、御礼申し上げます。また、撫子の会発足後に他界した元豊島副会長の筧光正先輩と既に他界された恩師の皆様のご冥福をお祈りします。尚、「小金井小学校第一回同窓会」開催から「撫子の会」発足まで、約二十年以上に亘る長い道のりは、またいつかまとめてみたいと思う。

『人生で必要な大切なことは全て小学校で教わった』

昭和四十五年小金井卒　丸森　菜穂

現在私は、小学校の音楽の教師をしています。これは卒業の時の将来の夢と同じ。六年生の時に音楽を教えていただいた、柘植先生の影響です。

柘植先生の音楽の授業は、当時の小学校の内容としては、とてもレベルの高いものだったと思います。先生は、即興演奏などの創作表現にも力を入れて指導され、当時音楽と体育以外には自分の存在を示す場所のない私に、表現の楽しさを味合わせてくださいました。先生はその後、都内の校長先生になられましたが、残念ながら若くして他界されました。

先日私の生徒のお母さんと話をしているうちに、その方が小金井の一年下の方だということが分かりました。「先生（私）の子どもたちへの接し方を見ていると、柘植先生の教え子という感じがしますよ。」と言って頂いて、とても嬉しく思いました。

私は神戸からの転入生ということもあって、人間関係ではそれなりに苦労しましたが、豊かなカリキュラムの中で学んだ多くのこと、高い希望を持って生きること等、人生の基盤を小学校時代に築けたことは、幸せなことでした。

夫が同級生という事もあり、多くの同級生と親交があります。先日の同窓会も四十五年卒業組は大いに盛り上がりました。これも私の宝物です。

『一宇荘生活の思い出』

昭和四十七年小金井卒　梅里　典子

私は山や高原が好きで、毎年夏になると、家族で蓼科へ行く。木々の葉や風の音、鳥のさえずり草木の匂い、そして澄んだ空気が好きだ。小学校時代、自然とたくさんふれあった一宇荘での体験が、今の私の原点となっているような気がする。

一宇荘は、茅野駅の南約四キロメートルの高台にあり、正面に八ケ岳、蓼科、霧が峰の雄大な山々を見わたし、眼下に諏訪湖を見おろす、すばらしい景観の地に建っていた。

一宇荘生活は、四年から毎年経験するが、中でも六年は四泊五日と長く、内容も濃かった。

鷲ケ峰や蓼科山登山では、急坂で岩がごろごろしている山道を登って心身を鍛え、千代田湖での飯盒炊さんでは、鍋と飯盒をかわりばんこに持ったりまきを拾ったりして友達と協力し、俳句作りでは、風景や体験をもとに心に響いたことを表現した。思えば、自然をまるごと体験した五日間だった。

当時の写真を見ると、皆なんと表情が生き生きしていることだろう。卒業して三十年経った今も♪ちのーのまーちーなみー♪で始まる歌と共に、一宇荘でのいろいろな出来事が鮮やかに思い出される。

いつかまた、先生を囲んで、クラスの友達と一宇荘を訪れてみたい。

▲▶山と海。源流からの伝統。

写真提供＝藤原副校長「同窓の皆さんの心のふるさととして（茅野の一宇荘、鵜原海岸の至楽荘に）再び訪れていただけることをお待ちしています。」

特集2＝第三回総会

「撫子の会」第三回総会が左記によって開かれました。その議事報告と、この総会に関連した内容から成る特集です。

■日時　平成十四年五月十八日（土）午後
■場所　母校附属小金井小学校体育館
■議案　1・収支決算の件
　　2・会則変更の件
　　3・役員改選の件
　　4・その他

『議事報告』

定刻を回り、司会の川田紀雄氏（昭和四十一年小金井卒）から本日の出席者及び委任状により開催の定数を満たしていることが報告され、開会する旨が伝えられ、天城会長並びに福富校長両氏からご挨拶を頂いた後、議長選任を諮ったところ司会一任の声があり、司会者から早川裕夫氏（昭和十九年豊島卒）としたい旨提案があり賛成多数で承認され、早川氏が議長席に着き議案審議に入った。

●第1号議案「収支決算」の件

議長より会計担当の佐々木正隆監事（昭和四十一年小金井卒）が指名され、決算報告及び監査結果報告がなされ、これを質疑応答を含め議場に諮ったところ賛成多数で承認された。（別掲決算書ご参照）

●第2号議案「会則変更」の件

この件は理事会が評議員会に諮った結果の理事会提案で、議長の指名により金子修也理事（昭和二十五年追分卒）から、配付資料にそって変更案の説明があり、これを質疑応答を含め議場に諮ったところ賛成多数で可決された。

＊解説＝第2号議案「会則変更」の事由

会則の変更は、第3回総会での重要議案のひとつであったため、別掲の「改訂後の会則」にそって以下に変更の事由を解説します。

1・校名の変更

第2条と第6条の一部変更は、母校の校名変更にともなう、いわば自動的な記名変更です。東京学芸大学附属小金井小学校が東京学芸大学教育学部附属小金井小学校になりました。

2・役員制度の変更

第7条のほぼ全面的変更は提案の根幹となるものです。

その第一点は、これまで50名以内として設置していた評議員制度の廃止です。これまでは評議員が理事と監事を選出する、いわば間接選挙制を採用していました。しかし、評議員会の召集には経費を要し、しかも成立定数不足で成立しがたいこと、また、三校同窓会が合同してすでに十年を経過し馴染んできたことにより、評議員会による三校間の調整機能が不要化してきたことによっています。第二点は、3名としていた副会長を1名とすることです。これも、暗黙には三校割り振りにする必要がもはやなくなったことによっています。

第三点は、17名以内として設置していた理事を12名以内とすることです。

これらのいずれもヘッドヘビーをなくして役員の選出および役員会の開催と活動に機動性をもたせることを目的とした変更です。

3・関連条項の変更

以下に示す条項は、第7条の変更に連動して変更を要するものです。

第8条（評議員の選出に関する条）＝削除します。この条の廃止により、改訂後は以下の条の数が1条ずつ繰り上げになります。（以下、この解説では変更により繰り上げた新条数を用います。）

第8条（理事及び監事の選出に関する条）＝評議員による選出に替わり、総会で選出します。いわば直接選挙制への変更です。

第13条（総会による承認事項に関する条）のうち＝第3項（ロ）評議員の選出を削除します。

第4項（役員会が総会による付託事項に対処することを定めた項）のうち、評議員会を指定した部分を削除します。第5項（評議員会の構成と成立条件の項）を削除します。

●第4号議案「役員改選」

改訂した会則にもとづいて、議長が当総会での立候補者を含む選出方法を諮ったところ、立候補者はなく、議長一任の声があり、このことが賛成多数で承認され、議長が別掲の新役員（平成十四年一月十九日開催の評議員会による案）を提示し議場に諮ったところ賛成多数で承認された。

続いて会則にもとづき新理事による会長と副会長

の互選がなされ、選出された藤田新会長より議場に対し報告がなされ、承認された。

引き続き議長の指名により藤田新会長が就任挨拶を行った（この会報の第1ページに掲載）。

＊この互選を行う間、川田理事より名簿の編纂進捗状況報告がなされました。

●第5号議案「その他」

議長がその他の動議ないし質問等を受け付ける旨述べ、新理事会より「決定事項の主旨を犯さない範囲での字句一部変更の理事会依任承認の件」が諮られ、承認され、もって全議案の審議を終了した。

＊＊＊

なお、議長の早川氏は閉会宣言に際し、新会長を知る者として個人的発言であると断った上で、新会長のお人柄を友人のことばで紹介し、新会長をもり立てて欲しいと心暖かなスピーチをなさり、満場拍手となりました。

＊＊＊

総会閉会後は会場を校舎2階の食堂に移して懇親会が催され、藤原副校長ほかご挨拶をいただき乾杯をし、会場は年増…おっと転換ミス、豊島の方々や比較的若い小金井、その中をとっての追分の、すでに垣根はなく…それはそうだ、豊島も追分も校舎がないのだから垣根があるはずがない、賑やかな一刻が過ぎて、金子新副会長の五本〆でお開きとなりました。すべてが終わって夕暮れの校舎を出るときにヤギがメェーと送ってくれました。

●新役員…よろしくお願いします

理事会長　藤田暉夫（昭和19年卒）豊島
副会長　金子修也（昭和25年卒）追分
豊島　武見健三（昭和19年卒）
金子誠一（昭和25年卒）
追分　宮坂庸也（昭和26年卒）
西山マサ子（昭和32年卒）
小金井　佐々智樹（昭和39年卒）
川田紀雄（昭和41年卒）
藤原　豊（昭和42年卒）
菅沼和江（昭和42年卒）
丸森一寛（昭和45年卒）
監事　小金井　佐々木正隆（昭和41年卒）
高木織江（昭和41年卒）

◀スピーチする藤田新会長

■改定された新しい会則です…

撫子の会 会則

制定　平成６年６月5日
改定　平成１４年５月１８日

第１条（会の名称）
東京学芸大学附属小金井小学校創立周年、開校30周年を契機に、本校同窓会と東京府豊島師範学校附属小学校（明治44 年創立）及び、東京学芸大学東京第二師範学校追分附属小学校（昭和20 年創立）の同窓会を統合して、「撫子の会」とする。

第２条（会の本部）
この会の本部を東京都小金井市貫井北町4 - 1 - 1 東京学芸大学教育学部附属小金井小学校内に置く。

第３条（支部の設置）
この会は、必要に応じて支部を置くことができる。

第４条（会の目的）
この会は、会員がお互いに親睦を深めることを目的とする。

第５条（会の事業）
この会の目的を達成するために次のことをする。
１）会報の発行。
２）会員名簿の整備と発行。
３）親睦会などの各種集会の実施。
４）その他この会の目的を達成するために必要なこと。

第６条（会員）
この会の会員は、次の特別会員と正会員とする。
特別会員
正会員が学んだ次の各号に記される学校の教職員。
正会員
１）東京学芸大学教育学部附属小金井小学校（東京学芸大学附属小金井小学校を含む）の卒業生。
２）東京府豊島師範学校附属小学校（同　国民学校、東京第二師範学校附属国民学校、東京第二師範学校男子部及び女子部附属小学校、東京学芸大学附属豊島小学校を含む）の卒業生。
３）東京学芸大学東京第二師範学校追分附属小学校（東京学芸大学附属追分小学校を含む）の卒業生。
４）上記の２）及び３）に記される各校の高等科の卒業生。
５）上記の各校に在籍し、中途で他校に移った者で、この会に入会を希望する者。

第７条（役員）
この会に次の役員を置く。
１）会長１名、副会長１名
２）理事１２名以内
３）監事３名以内

第８条（役員の選出）
理事及び監事は、総会において正会員の中から選出する。

第９条（正副会長の選出）
会長及び副会長は、理事会に於いて互選により選出する。

第10条（正副会長の職務）
会長はこの会を代表し、会務を統一管理する。副会長は会長を補佐し、会長不在の時はその職務を代行する。

第11条（役員任期）
理事及び監事の任期は、２年とし、再任することができる。

第12条（顧問）
この会に顧問を置くことができる。顧問は、原則として会員の中から、理事会が推挙する。

第13条（総会と理事会）
この会の総会、会議は次のとおりとする。
１）総会は、会長が召集する。但し、理事会が必要と認めたとき、または、１００名以上の正会員の請求があったときは、臨時に総会を開かなければならない。
２）総会の決議は、出席正会員の過半数で決する。但し、予め書面で意思表示した者は出席者した者とみなす。
３）次の事項は、総会に提出し承認を受けなければならない。
（イ）収支決算
（ロ）会則の改廃
（ハ）その他理事会または会長が必要と認めたこと。
４）理事会は、この会則が定める事項の外、総会より付託された事項を処理する。
６）理事会は、理事の過半数の出席により成立し、その決議は、出席者の過半数により決する。

第14条（会の資産）
この会の資産は、入会金、寄付金、その他の収入による。

第15条（入会金）
正会員は入会金として、２０００円を卒業時に納める。

付　則
１・この会則は、平成１４年5月１８日より実施する。

参考資料

【1】会則　■これまで　→　●改定後
廃止・削除の結果は、条・項・号を繰り上げ

第7条（役員）

■		●
1）会長1名、副会長3名	→	副会長を1名に
2）評議員50名以内	→	廃止
3）理事17名以内	→	12名以内に
4）監事3名以内	→	変わらず

■第8条＝評議員の選出について定めた条→●条ごと全面削除（廃止）

■第9条＝理事及び監事の選出を定めた条
太文字部分を削除して→●第8条（役員の選出）
理事及び監事は、評議員会において正会員の中から選出する。但し、この会則による第1回の理事及び監事の選出は、総会において行うものとする。

■第14条＝総会と役員会について定めた条→●第13条（総会と理事会）
その中で評議員会について定めた項・号の、太文字部分を削除
3）次の事項は、総会に提出し承認を受けなければならない。
（イ）収支決算（ロ）評議員の選出（ハ）会則の改廃
（ニ）その他理事会または会長が必要と認めたこと
4）評議員会及び理事会は、この会則が定める事項の外……。
5）評議員会は、……。（この項全面削除）

【2】監査報告書
平成13年度収支決算書を監査の結果、上記（収支決算書を指す）の通り相違ありません。

監　事　逆瀬川素行（豊　島　昭30）
監　事　坂田　義輝（追　分　昭26）
監　事　島田　　孝（小金井　昭41）

たくさん、お便りをいただきました…

『撫子の会総会に出席して』

旧職員　市川　英俊

附属小金井小から公立小学校の教頭として異動し、三年目を迎えました。いつも小金井小より行事がある度にご丁重なご案内をいただいていますが、校務多忙で、なかなか出席できなく申し訳なく思っていました。今回は土曜日ということで久しぶりの小金井小訪問を楽しみにしていました。

総会では、藤田新会長が決まり、今後の会の発展が期待されました。懐かしい先輩の先生方にもお目にかかることができ出席してよかったと思いました。残念だったのは、懇親会のお料理がかなり沢山残っていたこと。きっと、参加された方々の話がはずみ、召し上がる時間が無かったのかもしれません。大先輩の長谷先生が、終わってから「おなかがすいたね。」とおっしゃっていたのが印象的でした。そこで、先生方と二次会。楽しい一日でした。

今回出席されなかった方も次回は是非出席されるとよいと思います。お世話くださった役員の皆様方に心より御礼申し上げます。有難うございました。

（足立区立千寿小学校教頭）

▶校長室で＝右から天城前会長・福富校長（後）藤田新会長・金子新副会長

◀午後二時三分の二人のアリバイ

◀話がはずむ懇親会

楽しかった『撫子の会』

旧職員　小川　拾

新緑薫る五月、附属小金井小学校で同窓会「撫子の会」が開催され、大勢の卒業生の皆さんとお会い出来てたいへん嬉しく思いました。

追分小学校卒業生の皆さんから、私に理科の勉強を教わりましたなどといわれ、どんな授業をしたのかしらなどと若かりし頃のことを思いだし話がはずみました。小金井小学校卒業生の皆さんとは、開校間もない頃卒業された方々やその後低学年を担任した頃の方々ともお会いしました。

ご立派に成られた皆さんと三十余年を経て、学校生活のことやご家庭のこと、人生経験のことなどを語り合えるなんて素晴らしいことだなと思いました。皆さんから生きて行く力、喜びをいただきました。

瞬く間に時間が過ぎてしまいました。皆さん健康に留意し元気でご活躍下さい。またお会いしましょう。

役員、幹事の皆さんありがとうございました。

『幼き日体験知』

旧職員　佐島　群巳

私が生まれたのは一九二九年で、世界恐慌の真只中であった。小学校に入学する一九三六年も、経済が落ち込み、私の住んでいた岩手県の農村の疲弊は、目を覆うばかりの痛ましいものであった。

我が家の食事メニューは。変りばえのしない、朝食は、ご飯に、納豆、豆腐の味噌汁だけだった。たまに夕食は、たらやカツオのあら汁を食することが、私達にとってのご馳走であった。

小学校は、歩いて十分程の近い所にあった。父が夜なべしながら作ってくれた藁草履を履いていった。いつの間にか、その草履を小わきにかかえて、裸足で学校へ行ったものである。それは、父親の居眠りしながら草履を編んでいる姿を見て知っていたからである。物の値打ちというものを父の働きから学んだ。

小学二年の頃は、半人前の労働力として家族労働の中に組み込まれていた。学校から帰る兄弟を待ち構えて父は、畑や田んぼに連れて行くのである。私は「働くこと」の意味を大きくなって『価値』を生み出すものだった、ということを知った

真夏には、よく蚊に刺されたが、すっかり免疫が出来ているのか、痒くならない。しかし、都会の蚊は、私の体質にあわない。免疫・適応力を失ったのだろうか。

『夢は正夢』

旧職員　長谷　昭

「夢は正夢」。この言葉は、学芸大学を卒業後ヤクルト・スワローズへ入団、シーズン終了と共に、ベストナインに選ばれたりした元プロ野球選手の栗山英樹君が、色紙に書くサインです。自らの夢を正夢とするべく、それはそれは厳しい練習を重ね正選手としてのポジションを得たのです。

卒業生の皆さんにも、それなりの夢があったことでしょう。子どもの頃の作文に、また卒業期の文集に、将来の夢を述べていたことを思い出されること

でしょう。その夢を単なる夢で終らせるのでなく、正夢として、具現化するための努力を重ねてこられたことでしょう。

先日の同窓会総会で久しぶりに会った大勢の卒業生を見ると、社会人として、各分野で活躍している様子を伺わせる姿を見せてくれました。頂いた名刺に、交わされる話の中に、今その道の第一線で活躍していることを知ることができました。

在校中は、口数も少なく、または消極的で心配していた人もいましたが、全くその心配はいりませんでした。

私も、みなさんと一緒に生活をしていた頃には、みなさんの将来に対する夢を私なりに描いていましたが、現在の姿からは、心配は消え不安はなくなり、立派になった「正夢」ばかりでした。大変嬉しかったです。またお会いするときには、もっともっと大きくなった姿を見ることが出来るでしょう。期待しています。夢は正夢に…。

『総会に参加して』

昭和十八年豊島卒　**総会参加者一同**

私たちは豊島附小・昭和十八年卒（三十二回）で、同期会の名前も三二会。年に一度の旅行、秋の総会、赤（男子）白（男子）緑（女子）各級ごとのクラス会と、交友を深めております。同窓会にも毎回多数参加しています。

五月十八日開かれた「撫子の会」に参加した皆の当日の感想、希望、昔日への思い等々を纏めてみました。

総会の当日、校門を入ると真夏のような日差しを遮るようにそそり立つ欅並木が続いていた。

豊島の校門とは異なっていても六十余年昔にタイムスリップ。懐かしさに包まれた一日でした。

●

豊島附小を卒業して来年で六十年を迎えます。今までに数回、小金井小学校を訪ねてその教育環境の素晴らしさ、そして教育内容や躾など目を見張るばかりです。

創立九十周年の記念式典に列席してその最高の成果を眼のあたりにしました。これから先も日本の教育の先頭に立ち確かな姿勢を示して頂きたいと願うものです。

●

我が心のふるさと豊島は小金井に引き継がれ抜群の教育環境にも恵まれて、後輩たちはすくすくと育っていることと思います。次回同窓会では生徒の皆さんと会って話ができる機会を作って下さい。

●

よろずスポーツ何でも苦手の私が、水泳だけは人並以上に出来るようになったのは豊島と至楽荘のお陰と感謝しています。

●

生まれて始めて参加した「撫子同窓会」の渦中こう思った。私が入学した昭和十二年の豊島附小にもし第一回卒業生が見えたとしたら三十八歳、また今、小金井小一回生が見えたらもう五十歳。そして私は七十一歳の大老人…だと。開校時にトシマから移植した樹があると聞いたので探し始めたが、なんだか自分を見る思いがして探訪中止。懐かしくも寂しい一日でした。

●

豊島の小学校の頃「ともしらが」と言う言葉を習

▶一人モテモテ

◀ボクも父親やってます。

◀「藤田クンごくろうさんだね」

「がんばってね」

「ウン」（左端が藤田新会長）

った。その時は火星の国の話のように聞いていたが、今見まわすと、まわりは白髪、白髪の波…。何十年の年輪を重ねて感無量の一日でした。

●

当時でもプールもあり、設備の整った自慢の学校でしたが、いまやあまりにも立派になって驚くばかり。通いなれた池袋だったらとちょっぴり淋しい気も…。

●

小金井市在住者ですが、時々JR武蔵小金井駅で撫子の徽章をつけた可愛らしい小学生達を見かけると、数十年前の、池袋まえの同級生達の姿を懐かしく思い出します。同窓会も新会長の下でしばしば会を開くようにして頂ければ、より盛会になることと思います。キャンパスも今頃は深い緑に覆われて…散歩に絶好の季節です。

●

同窓会の中心は次第に世代が移りつつも、撫子の校章のもと立派に受け継がれていることを目の当りに見て、とても心強く嬉しく、そして誇らしく感じました。

●

一宇荘での自然との生活「箱根の山」を歌いながら歩いた杉の並木、至楽荘での遠泳等が走馬燈のように思い出されます。豊島小での多くの体験と楽しい思い出を宝物として何時までも大切にしたいと思います。

●

中庭の一隅から久しく聞かなかったコケコッコウの声が…。いいなァ。誰かが言いました。花壇にも初夏の花々が咲き、これだけで学校の中味がわかるような気がして先輩は一寸嬉しくなり　そして大きな感謝を覚えました。

（文責＝桝幸）

『第三回撫子の会総会に出席して』

昭和二十六年追分卒　宮坂　庸也

十年前、当会が現在の住まい立川に近い小金井で発足して、附属追分小学校を身近に懐かしく感ずるようになりました。

（その子たちは）何年も前に卒業された筈ですが、朝の通勤途上のバス停で一緒に並んだ男の子の帽子に撫子の花の校章を見る度に声を掛けたい衝動にかられていましたから、尚更だったのでしょう。

今までこの会の理事を続けて来られた同期の藤澤治美さんが、町会議員立候補の準備に加えて三つ子のお孫さんが生まれて忙しくなるから理事を辞めたい、ついては替われというのです。

サラリーマンは卒業したけれど自分の仕事を立上げ中という当方の事情を知り、彼女も八方手を尽くし、当方のパスが認められそうだったのですが土壇場でアウトになり、お引き受けせざるを得なくなりました。

（お互いに）話し合っていると、校章だけでなく等質の小学校教育を受けた「同窓」が実感になりますが、一万人の同窓会の運営は相当に重荷です。

藤澤さんが適任者だっただけにどの程度お役に立つか心許ないのですが、前向きの姿勢で努力しますので宜しくお願いします。

『総会の日に』

昭和四十七年小金井卒　遊佐　小百合

学校で山羊を飼っているの？　受付で約束のUさ

んの出席を確認し体育館へ。が、どうやら方向を間違えたらしい。思い出の花壇でも（絵心のない私の最初で最後か、紫色が良いと褒められて市の作品展に出たお花の絵…）探そうと思った途端山羊に遇う。??回顧から現実に戻された。総会では、新旧役員の方々に感謝の拍手をしながら、友人探し。三～六年担任、揉み上げの佐島群巳先生を発見。いる。周りには知った顔が並んでいる。懇親会では、小さな青春の思い出一つ一つに話が弾んだ。中でも、Hさんが一年学芸会でのセリフを覚えているのには、驚きと尊敬！

ところで、私たちの世代の「虫の一生」の学習といえば『蚕』だった。私も蚕の出来るのが嬉しくて、その為にせっせと桑の葉をやり世話したものだった。今、同期が集まれば、「学校から小金井駅まで帰る途中の桑畑でよく葉を摘んだよね…」と、この日も帰りのバスで、一・二年担任の小川格先生とTさんと、この話を懐かしんだ。が先生は、それ以降の蚕の生態の新しい発見（?）まで話されたのである。その場で大きく頷いた私も、今は?。小学生のままの知識に止まっている。

メンバーを増やし、夕方からは佐島先生を囲んでの同期会。欠席の私は後日談と写真で楽しんだ。

総会後のお礼状の中から
…抜粋させて頂きました

●榎本隆治　旧職員

この度は緑の風薫る好季に第三回撫子の会総会に参加の栄を得まして、有難うございました。

何十年振りで追分小の皆様にお会い出来まして懐かしい限りでありました。本日は亦スナップ写真をお送り頂き恐縮に存じました。厚く御礼申し上げます。亦機会を得て追分小の皆様にお会い出来ればと存じます。どうぞ皆様によろしく御風声の程お願い申し上げます。

●小幡利江　（旧姓二本木）昭和三十一年追分卒

その節は大変お世話様になりました。お陰様で本当に楽しい一刻を過ごさせて頂きました。お懐かしい先生方にお目もじ出来、何十年か前の追分時代の一コマ一コマが沸々と思い出されました。

●上山浩一　昭和三十九年追分卒

初めて参加した撫子の会は、楽しかったです。散会後、小池麒一郎様（昭和十九年豊島卒）等とともに十名で二次会を催しました。わざわざお送り頂いた写真はよい思い出です。

先生方が
近況をお知らせ下さいました…

五十音順・敬称略

・**圷廣八郎**＝十四年三月三十一日までの勤務先は中野区立向台小学校です。
・**市川英俊**＝教頭職三年目。多忙な日々を過ごしています。
・**伊東一郎**＝なにしろ高齢になりました。
・**岩田愛子**＝何とか元気に過ごしています。
・**岩本廣美**＝当地奈良県で仕事の予定があります。
・**大谷文彦**＝多摩運転免許本部（試験場）を学区にもつ、多摩霊園南側の府中第十小学校に勤務しています。
・**大橋武男**＝昨年十一月より体調を崩し二月に入院し中旬には退院しました。
・**岡　虎夫**＝昨年は悪い年で釣竿をなくしたり、カメラをなくしたり、おまけに命まで心配しましたが十一月二日肺腫瘍の手術、九日退院。今年は良い年にしようと思っています。
・**岡村由紀子**＝小金井小に三年間在職した頃を懐かしく思い出しております。今は元の教え子との子育て、介護の情報交換が楽しみです。
・**岡本広子**＝元気で毎日を過ごしております。
・**柄沢渥子**＝群馬の地で満十年となります。元気に土と親しんで居ります。家から浅間山の噴火が見えます。
・**小池宗嗣**＝代筆家人＝足腰ともに弱くなり一人で外出することが出来ません。
・**小島　康**＝現在、杉並区立堀之内小学校に勤務しています。
・**腰山太刀男**＝二月初めより体調を崩し入院しましたが、だいぶ良くなりました。
・**佐々木敬子**＝夫と二人の生活です。互いに自由に趣味を楽しんでいます。私は子供の頃から好きだった自然とのお付き合い、鳥や昆虫や山野草を尋ね歩いています。そして、自然を守るお手伝い少しでも出来たらと思っています。
・**佐藤中庸**＝実は過日より健康を損ねています。
・**柴田銀松**＝遺族・石本吉枝＝平成十二年三月に死去致しました。生前には大変お世話になりまして有難うございました。撫子の会のご発展を心よりお祈りしえ居ります。
・**世古　潤**＝神津島では二年目になり、ようやく島の生活に慣れました。
・**高浦　浩**＝美しい鳥取で元気に過ごして居ります。

大学は激動の時期にあって統合再編成等の問題で落ち着かない毎日です。

・**高玉ハル子**＝現在、入院加療中です。

・**田中延男**＝地域の行事に参加しています。

・**内藤省孝**＝二月に妻を亡くし、目下とりこんでおりますが、この頃には落ち着いていると思います。

・**長田耕一**＝小金井第四小学校に勤めています。

・**南雲久美子**＝中野ネイチャークラブを主催しています。長男十六才、次男十二才。ホームページを開く予定です。

・**西村文男**＝私は大変元気で連日、全国の研修会等に走りまわっています。

・**花村　操**＝唯今、茶道・陶芸を楽しんでいます。

・**伴　勝雄**＝出血胃潰瘍で胃全摘出の手術を受け、五週間の入院をしました。現在本調子ではありませんが徐々に快方に向かっております。

・**平松　譲**＝絵の仕事を続けております。地方展のことが重なり失礼させていただきます。

・**平山久子**＝代筆・平山幸一＝昨年十一月肺腺ガンの手術で右上葉切除致しました。その後、痰が気管に詰まる事故があり昏倒。現在も入院加療中です。

・**深海龍夫**＝ペネッセ教育研究所に勤めております。三年目に入りますが、学校教育を側面から支えることに喜びを感じております。時には環境学習を関東地区で行っております。

・**福田梅生**＝体調を崩しております。

・**藤島清雄**＝気は若いつもりでいても行動が伴わず歯がゆい思いをします。体調を見て無理をしないように心掛けています。

・**藤田新吉**＝随分高齢（九十四歳）となり、膝関節痛のため歩行不自由。欠席お許し下さい。

・**星野正男**＝小生緑内障のため、外出を控えております。

・**馬渕金男**＝当日、講議の予定が入っています。

＊馬淵先生はこのお知らせの後日お亡くなりなさいました（合掌）。→18ページ

・**三毛迪子**＝二月で七十六才になりましたが元気で過ごしております。

・**湊　謙一**＝出席させて頂ける状態ではないです。

・**宮越　賢**＝平成十三年三月末をもって東京学芸大学を定年退職。その後は静かに亡くなった妻和子に香華を手向ける毎日です。

・**向山康江**＝病院通いに生活の日程を合わせて過ごしています。

・**目賀田八郎**＝元気に前職の尾を引きずって仕事をしています。

・**村上　稔**＝毎日を気ままに過ごしています。

〃　**真佐子**＝体調が不安定なものですから欠席させて頂きます。ご盛会と成りますようにお祈り致します。

特集3＝母校からのメッセージ

…藤原先生がお寄せ下さいました。

『小金井小学校のいま』

小金井小学校　副校長　**藤原　直之**

小金井小学校の校舎は、大規模改修の際に配置を変更したこともあり、全体に明るくなりました。昭和年代の教室の面影は、あまり残っておりません。東門通りのケヤキの緑はいよいよ濃く、校庭のクスノキの幹はいよいよ太くなっています。かつてタイヤランドと呼んでいた南東の雑草地には、六階建ての国際交流会館がそびえています。プール横に移動した学級園では、草花にまじってキュウリやトマトなどが実をつけています。ザリガニ池や丸池には、アヒルやカルガモが遊んでいます。教官室には、クジャクも混じってニワトリの鳴く声がひっきりなしに聞こえます。中学校との間には、ヤギが草を食んでいます。長く伸ばしたヒゲに、のどかさを感じます。

小金井小学校には七月現在、937人の子どもと、57人の教職員がおります。高架と複々線の工事が進行中の武蔵小金井駅には、朝に夕に子供たちが群れています。ランドセルはソフトなものに変わりましたが、昔と変わらぬ制服を着ていますから、すぐわかると思います。「勉強よりももっと躾を」と、電話でお叱りを受けているのは昔とあまり変わっていません。

ところで、いわゆる『構造改革』の波が本校にも押し寄せ、学校の地盤が大きく揺れ動いています。国家公務員の定員削減により、とうとう本校教官も減員の対象になります。先生方にはその分仕事がのしかかってくるものと思います。本校の教育と施設面をカバーするための後援会『なでしこ育成会』は、新たにその体裁を整えました。保護者以外にも広く小金井小学校への支援を求め、国に寄付する形をとっています。同窓生からの寄付も大いに歓迎するところです。

教員養成のシステムも、国立大学や教育学部、附属学校の再編成や統合という動きが進行しています。本校は、平成十六年度から独立行政法人の小学校になる見通しです。

これまで見てきたように、自然は豊かに人を包んでいるのですが、附属学校にとっては大変の時です。これまで長い時間にわたって、諸先輩が苦心して築き折り合いをつけてきたことも少なくないと思います。大きな波に対しては、よく考え、生き残りの道を探っていかなければと考えます。

昨年末の卒業証書の番号は、豊島・追分・小金井の三校を通算して13788番でした。昭和七年鶏原海岸の高みに建てられた至楽荘は、十年前に新築されました。一宇荘も箱根から茅野に移転して三十年増改築を済ませてなお、新しさを保っています。いずれも、同窓の皆さんの心のふるさととして再び訪れていただけるようお待ちしています。

合わせて

…寄付・寄贈のお願い

昨年九月、千葉県にお住まいの方から同窓会「撫子の会」へ、寄付のお手紙をいただきました。九十二歳でご逝去されたお母様の遺志で、本校同窓会に寄付したい旨が書かれておりました。名簿や会報を見ますと、お母様は昭和十二年卒の欄に掲載されており、盛岡にお住まいの後、お手紙を下さった息子さんとごいっしょに柏でお過ごしだったようです。母校や同窓会に思いを寄せていただくことは、豊島小学校の後身の小学校に関わる者としても、大変ありがたく思います。

若いうちは学校に対しては人それぞれに、いろいろな思いもありましょうが、歳をとるにつれ、共に時間を過ごした仲間がいること、よりどころとなる母校があるということが、こよなく貴重な「財産」になるものと思います。

皆様の昔の品物（卒業証書や小学校時代のアルバムとか成績表など）をお持ちで、処分にお困りでしたら、同窓会でも小学校でも、ありがたく頂戴しております。ご寄付・ご寄贈をいただき、有意義に生かさせていただきたいと考えています。

■ご冥福を祈ります■

藤原副校長より小金井小学校関係の先生方のご逝去のお伝えと故人のご紹介をいただきました。

・**馬淵金男先生**＝平成十四年六月十日ご逝去
昭和五十一年からの三年間は、宮内庁に出向して東宮侍従を務めた。小金井小学校での在籍期間は昭和四十一年から昭和五十六年三月までの十二年間。その後、中野区教委で指導主事、台東区立根岸小学校長を歴任、道徳教育を中心とした教育を推進した。

・**渡辺孝三先生**＝平成十三年八月二日ご逝去
昭和四十五年から四年間、小金井小学校の第四代校長として、茅野に移転建設された一宇荘の運営等に努力した。また、専門とする学校教育の法的側面に関して附属教官の指導育成に力を尽くした。大学退官後は文教大学をはじめとする私学の振興に関わった。

・**清水和行先生**＝平成十三年七月十三日ご逝去
昭和六十二年から平成十三年三月までの十四年間小金井小学校に勤務。保健体育科に属し、至楽荘の運営をはじめ生活指導や後輩の指導に力を尽くした。独特の個性で、人を惹きつけるパワーを持ち続けた。教頭要員として、東京都江戸川区松江第五小学校に転出し、活躍を期待されていた矢先

後輩たち（写真提供＝藤原副校長）

に亡くなられた。

・**嘉戸 脩先生**＝平成十一年九月六日ご逝去
河井芳文校長急逝の後を受けて、平成二年一月より平成七年三月まで校長を務めた。テニスの名手で保健体育科教育学が専門ということもあって、海山での荘生活には張り切って臨んだ。好きだった酒のせいか手を尽くしたが及ばなかった。

・**菊地光秋先生**＝平成十一年三月三十一日ご逝去
昭和四十九年から五十四年三月まで五年間、校長を務めた。地理学が専門だったが、後に社会科教育に移り、教育に関わる幅広い活躍をした。尺八の練習を積んで腕を上げたが、遠足や一宇荘では子供に草笛を聞かせていた。

●名簿を作成してみて

昭和四十一年小金井卒　**川田紀雄**

名簿最終稿を印刷に回し終えてこの原稿を書いているところです。五月十八日に総会を終えてから約一ヶ月間、訂正情報と名簿希望の連絡が入ってきましたので、それを反映しながらついに締切りといたしました。やっと肩の荷を降ろすことが出来ます。後は、郵送作業を残すのみ。

そこで、少しでも今後の活動のプラスになればと思いながら、名簿の編集後記に書き込めなかったことをここに記すことにします。同窓会名簿に期待される内容についてです。

同窓会では今後ともいろいろなことを考え、実行していくことになると思いますが、その中でも名簿作成事業は活動のもっとも基本になる部分です。会則にも会員資格の項はちゃんとありますが、さてそれでは、会員は誰でどのぐらいいるのということになると、名簿しかそれを確かめる方法はありません。名簿作成こそが、同窓会のというと言い過ぎかもしれませんが要、名簿の大切さについて疑問の余地はありません。が、ここで皆さんに問いかけたいのはその中身についてです。折しも、個人情報保護についての話題が新聞紙上を賑わせていますが、今回の名簿では「本人の許す部分について掲載する」ということを原則に全体でのルールについての統一はしませんでした。なぜなら、この手の統一ルールを作ろうと議論するとどうしても最小限の情報に絞り込むことになってしまうからです。具体的には、在学校、勤務先については当然削ることになり、電話番号はまずいのではという意見が出れば、全員の電話番号を削ることになります。一万人以上の会員がいれば、住所についても意義がでて、結局名前だけの名簿になりそうなのが、今の風潮なのではないでしょうか。名前だけの名簿だとすると、作る気持ちも起きません。

もちろん、経歴などをそのまま載せることに問題がないとは言えないと思います。なにか、その人を評価するような雰囲気があるし、逆に母親、主婦として過ごして来た方は空欄のままです。首相経験者でも将来はただの「横須賀の小泉さん」になる。これはこれで民主的で結構なことかもしれませんが…。私が卒業した進学校の名簿はいやらしいもので、勤務先の手前には進学した大学が、その手前には出身校が載っているというようなものでした。全員が進学するわけではなく、これでは名簿掲載を拒否する同窓生が出るのも当然といったことになります。また一方で編集中に情報交換のあった先輩の学年では六十歳になったのを期に勤務先欄を空欄で統一することにした。という、何か晴れ晴れとした表情での

ご連絡もあり、経歴で縛られる社会からの解放を感じていらっしゃるのかなと感じたこともあります。

しかしながら、一万数千人の名簿と半年以上付き合っていますと、名前と住所だけでは「どんな先輩、後輩なんだろう。」という気持ちへの答えがなく、同じ名字の人を捜す様な楽しみしかないものを作っても仕方がないのかなという気分になってしまいます。別に、就職を頼みに行くのに便利であるというようなイメージでとらえないで下さい。そんなものにしたいわけではなくて、一万数千人という「資産」を皆さんに感じてもらうようなものができないかなぁ、という気持ちなのです。

母校の小学生と交流を持つようなときにどんな話がしてあげられるか、あるいは教えてあげられる得意なこととか、そんなことでいいのかもしれません。研究中のこと、仕事のこと、経験のこと、趣味のこと、ライフワーク、海外のこと、昔のこと…。何でもいいのですが、何か母校に貢献できる「一芸欄」（あまり、敷居が高いとダメですが、）のようなものができないかな、と考えています。読んでいると楽しくなる名簿になりそうな気がしませんか？

時節柄、ナイーブな問題ではありますが、何か良いアイデアはないでしょうか、一斉にということではなく、できるクラスからでもいいですよね。一緒に考えていただけたら、と思います。

編集後記

編集担当

この号の編集は、これまでの持ち回りで追分出身の理事が担当しました。といっても、文京区本郷で開いた編集会議には、理事ではありませんが追分卒で印刷業を営んでいて気心も通じあっている山佐福栄さんや、小金井卒で名簿編纂担当の理事・川田紀雄さんもご参画くださいました。また、むろん編集の立案に際しては新理事会の皆さまにも諮ってきました。

●

この号では新しく次のことを図りました。1＝判形をA4にし、合わせて文字組を10ポイントにして読みやすくしました。2＝予算の都合上1色刷りにし、今後のご担当のことも考えてあまり凝らない、デザインしないデザインの誌面にしようと心がけました。3段組みは三つ折り郵送に対応してのものです。

●

特集1「それぞれの源流」は、いちどは採り上げたいテーマでした。皆さまご多忙にもかかわらず味のある一文をお寄せくださいました。いつかもっと大々的に編纂すれば、「もうひとつの校史、学びの記録」になるでしょうか。そんなこともできる力のある「撫子の会」になればと祈願します。

特集2「総会報告」はこの号の必須記事です。できるだけ分かりやすくしようと努めたつもりです。さまざまなお便りも頂きました。

特集3「母校からのメッセージ」は、撫子の会と学校の掛け橋となることを意図してのものです。

●

頂いた御文の文章と漢字仮名づかいは、明らかな誤字脱字を除いてそのままとしました。それは、すでにそれぞれの年代の感覚と歴史でもあるからです。なお読者に分かりやすくするために一部の箇所に（）で編集部補足を加えたことと、数字の扱いを一定させていただいたことをお断りいたします。

●

最後になりましたが、御文をお寄せくださった各位に厚く御礼申し上げます。

■次号の特集は『一隅を照らす友』

『名簿を作成してみて』にもありました。有名人でなく地味だけど、社会に貢献している同窓生をご存知でしたら、卒年、お名前、何をなさっている方か教えてください。詳しくは編集部が取材します。

●寄稿のお願い

同期会、クラス会、同窓仲間のお集りなどをなさいましたら、短文にて写真など添えてお寄せください。いずれも次号の素材として引き継ぎます。

連絡先＝西山マサ子
電話&ファクス　03・3815・9619
メール kmyt@tcn-catv.ne.jp

「撫子の会」会報・第5号

発　行　平成十四年八月

この号の編集担当
金子　修也（昭和25年追分卒）
宮坂　庸也（昭和26年追分卒）
西山マサ子（昭和32年追分卒）旧姓・岡本
印刷＝山信印刷（山佐福栄・昭和28年追分卒）

事務局
東京学芸大学教育学部附属小金井小学校内
住　所　〒184・8501
小金井市貫井北町4・1・1
電　話　042・329・7823
ファクス　042・329・7826

撫子の会郵便振替口座
番　号　00100・8・709121
加入者名　撫子の会